

チョウのくらし探検(14)

ツマムラサキマダラのプロポーズ

放蝶温室内では、年間を通して約13種500頭のチョウが飛んでいます。温室内を観察していると、いろいろなチョウたちの行動が見られます。皆さんは、チョウのプロポーズを見たことがありますか？

晴れた天気の良い昼下がり、放蝶温室を歩いていると、葉の上や花に吸蜜中のオオゴマダラの上空でホバリングしているオオゴマダラが見られます。よく見ると止まっているのがメス、ホバリングしているのがオスです。そして、時折、オスの腹部の先から二股に分かれた、黄白色の毛束を出しています。

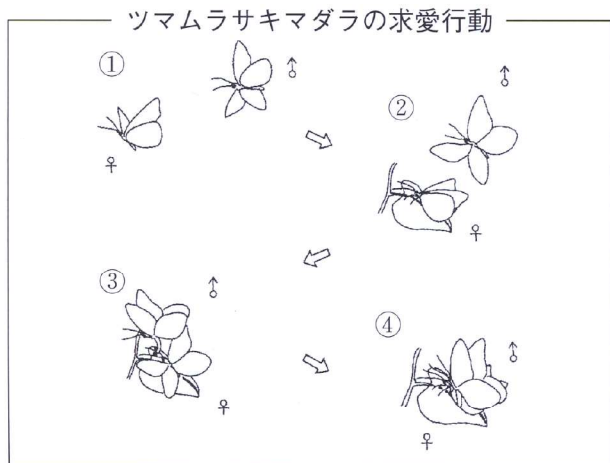
そう、これがオオゴマダラのプロポーズ＝求愛行動で、オスの腹部の先から出している毛束はヘアペンシルといい、オスはヘアペンシルから性フェロモンを放ち、メスをなだめたり、誘ったりします。

実は、ヘアペンシルこそがオオゴマダラなどのマダラチョウ科に多く見られる、においてメスを誘うプロポーズの必殺技みたいな物です。

するとオスの性フェロモンが効いたのでしょうか、オスはメスの横に止まり、交尾し、メスをぶら下げて、飛び去ってしまいました。

この他にもチョウたちは、いろいろな方法でプロポーズを行います。今回はサブ温室内で初めて見られたツマムラサキマダラ(マダラチョウ科)の求愛行動から交尾までの様子について紹介します。

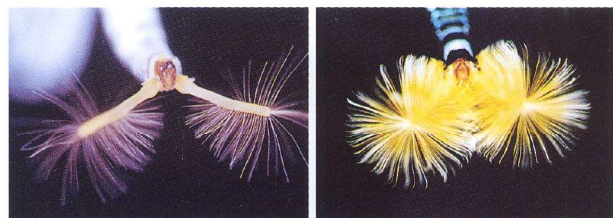
サブ温室内でのツマムラサキマダラの求愛行動は下図の様な行動が見られました。



ツマムラサキマダラの求愛行動の様子を見ると、

- ①他のマダラチョウ科同様、飛翔しているオスがメスを見つけ追跡飛翔を始めます。
- ②メスは植物の葉などに止まり、オスはメスの上空約20cmの所でホバリングをおこないます。
- ③オスは腹部の先からヘアペンシルを出し、メスの触角にむけて、1度ぶつかり、そしてメスの上空で2秒ほど、ホバリングした後。
- ④すばやくメスの横に止まったかと思えば(約1～2秒)、腹部をくの字に曲げて交尾し、約1分ほど休んだ後、オスはメスをぶら下げたまま、安全な場所に飛び去ってしまいました。

ツマムラサキマダラのヘアペンシルは、オオゴマダラより毛が多く、オスがヘアペンシルをメスにぶつけてから交尾までのすばやかさは圧巻でした。



▲ヘアペンシル オオゴマダラ(左)ツマムラサキマダラ(右)

そして、交尾を終えたメスは2～3日後にはガジュマルなどの新芽に産卵を始めますが、オスの求愛行動が成功する確率は極めて低く、途中でメスが飛び去ったり、拒否したりとチョウの世界も難しいようです。

最後に、よくリュウキュウアサギマダラが茂みの中などでホバリングしていることがあります。相手はメスかと見てみると、ツンベルギアエレクトの花(紫色)に一生懸命求愛しており、途中でメスが逃げたことに気づかなかったのか、それとも花の色をメスと間違えたのでしょうか。きっと、花だと気づいた時にはブルーな気分になったことでしょう。(久米)



▲ツマムラサキマダラの交尾

はなし の お 室 蛹

皆さんはカブトムシの蛹を見たことがありますか？ 実際に自分の目で見たことは無くても、図鑑やテレビなどで見たことのある人は多いのではないのでしょうか。その蛹は縦長の楕円形の部屋の中で壁にもたれるように立っていたと思います。この部屋の名前は「蛹室」と言って、蛹から成虫になるまで安全に過ごすために、幼虫がまわりの土をおしひろげて、糞と唾液でかためて作ったものです。

もちろん昆虫館では何度もカブトムシを飼育しているので、この縦長の蛹室を見る機会も多く、当たり前のように思っていたのですが、海外のカブトムシを飼育し始めて、ちょっとした違いに気がきました。



▲蛹室内のカブトムシの幼虫



▲蛹室内のカブトムシの蛹

昆虫館では、去年の4月からヘラクレスオオカブトムシ(以下ヘラクレス)やコーカサスオオカブトムシ(以下コーカサス)といった海外のカブトムシを展示し始め、産卵もさせて繁殖にも取り組んでいます。ヘラクレスやコーカサスは体が大きいこともあってか、去年の5月にふ化した幼虫が1年以上たった今年の7月になってもまだ幼虫のままでした。そして、8月になってやっと蛹室を作って蛹になるものがコーカサスの中に出始めました。するとコーカサスの蛹室は日本のカブトムシの縦長の蛹室とは違い、横長の蛹室だったのです。そして蛹はその中でもちろんのこと横たわっていました。このことは日本のカブトムシの縦長の蛹室を当たり前のように思っていた私にとっては新鮮に感じました。

昆虫館ではこの2種類のほかにも、アトラスオオカブトムシ、ゴホンツノカブトムシ、アクタエオンゾウカブトムシ、ノコギリタテヅノカブトムシ、サビイロカブトムシといったカブトムシの幼虫を飼育していますが、この中でもアトラスオオカブトムシとゴホンツノカブトムシが横長の蛹室を作ることを確認しています。また、カブトムシについて書かれ

た本や雑誌を調べてみると、ヘラクレスも横長の蛹室を作るようです。



▲コーカサスオオカブトムシ



▲ヘラクレスオオカブトムシ

このように蛹室について確認できた種類はわずか4種類にすぎないのですが、すべて横長の蛹室を作るものばかりでした。世界にはたくさんの種類のカブトムシがありますが、成虫や幼虫の生態が分かっているのはほんのわずかです。ですからこれから研究が進んで多くの種類について調べられた時、カブトムシの仲間の蛹室は横長が当たり前で、日本のカブトムシのように縦長の蛹室を作る方が珍しいということになるかもしれません。また考えもしなかったような形をした蛹室を作る種類がいるかもしれません。そのような日が来るのを楽しみにしています。

話は少し変わりますが、今回の話に関連して、日本のカブトムシの蛹を簡単に観察する方法を説明したいと思います。

まず初めに、深さ20cm直径9cmぐらいの透明な空きビンを用意します。インスタントコーヒーの空きビンなどがちょうどいいでしょう。そして、この中に市販のマットを湿らせて少し硬めに詰めてください。用意できたらその中に幼虫を入れてください。幼虫は自分で中にもぐって行って、蛹室を作って蛹になります。その際、このビンは中があまり広くないので、幼虫はビンの端や底のほうで蛹室を作ることが多く、運がよければ簡単に外から観察できるようになります。

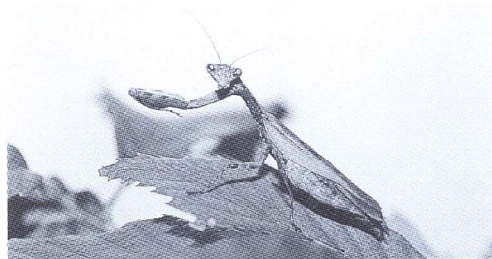
ちなみに、日本のカブトムシは5月下旬から6月にかけて土の中で蛹になるので、その少し前の4月から5月の中ごろにかけてビンの中に入れてやると良いでしょう。また、幼虫が蛹室を作り始めたら、ビンをあまり揺らしたり動かしたりしないようにしましょう。上手く蛹になれなかったり、上手く羽化できないおそれがあります。(佐々木)

しいく
飼育ニュース(34)しいく
ヒメカマキリの飼育について

カマキリの仲間は、世界に約1500種、日本では約10種が知られています。今回は、約10種類いるといわれているカマキリの仲間ヒメカマキリを紹介したいと思います。

昆虫図鑑では、ヒメカマキリが載っているのを見ますが、当館では実際に飼育したのが2年前からです。トビナナフシを採集しにクヌギ林にでかけ、樹の枝を網でガサガサとゆすっていると、小さい昆虫が一匹網に入りました。時々、ハラビロカマキリが入ることがあるのですが、それよりまだ小さいのでよく見ると、ヒメカマキリでした。

ヒメカマキリの成虫の体長は、オス25～32mm、メス25～31mmの大きさです。ヒメカマキリのヒメは、小さいという意味があります。皆さんが、よく見るオオカマキリやハラビロカマキリと比べると、大変小さいです。



▲ヒメカマキリのメス（成虫）

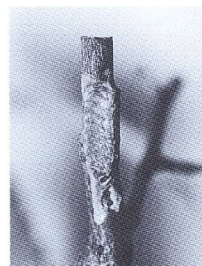
ヒメカマキリは、本州、四国、九州、対馬に見られ、照葉樹林部を好み日本固有種です。近縁種に少し大きいサツマヒメカマキリがいて、九州南部から琉球列島、台湾、ニューギニア等に分布しているそうです。

ヒメカマキリは9月頃から11月まで見られ、また、暖かい所では12月頃まで見られます。生息場所も林床や草原よりも、樹上で生活しています。

野外で採集して飼育していると、4個の卵（卵囊）が止まり木としていていた枝に産み付けてありました。カマキリ類の卵は、この卵囊の中にあります。カマキリの卵囊は種により型が異なっており、ヒメカマキリの卵囊は、長さ12mm・幅5.2mm程の大きさで丸みを帯びた箱型をし、オオカマキリの卵囊と比べると大変小さいです。産卵場所は樹皮の裏側や石の下、落ち葉の裏側、板塀などに産み付けられます。

25℃の温度で保存すると123日でふ化しました。それも4個の卵囊があるうち、たった一匹の幼虫がふ化しただけでした。そこで10℃で14日間保存し、

12.5℃で10日間保存、そして、25℃と温度差をつけてみました。すると、産卵後から197日目に1つ目の卵囊から18匹ふ化、2つ目では、207日目に42匹ふ化しました。残る2つは、全くふ化しませんでした。冬の間は卵の状態にあるので、うまくふ化させる為には温度差が関係しているのでしょうか？



▲ヒメカマキリの卵囊

1令幼虫は、アリによく似ていて体の色は黒く動きも素早いです。5令程になると茶褐色になり、飼育ケースに止まり木として入れてある木の枝にぶらさがり、前脚をのばし枝に擬態しているようにも思えます。

ヒメカマキリの生育日数（日）

	1令	2令	3令	4令	5令	6令	7令
オス	12	12	14	9	17	94	
	幼虫					成虫	
メス	11	12	5	11	14	13	142
	幼虫						成虫

オスは、ふ化後5回脱皮をくり返し6令目で羽化します。メスは、1回多く脱皮し7回目に羽化します。ふ化から成虫になるまでオス64日、メス66日かかり、また、成虫の寿命はオス94日、メス142日でした。1匹のメスが産む卵囊の数は6～8個で、最高は10個も産んだ個体もありました。

外見は同じですが、オスはメスに比べると細いです。また、飛翔力があり俊敏で、飼育中ちょっと目を離すと逃げられてしまいます。他のカマキリと比べると変わった特徴があり、幼虫もそうですが成虫も、驚くことで前脚、中脚、後脚をたたみ仰向けになり死んだふり（擬死）をします。

3令目までは体が小さく、ハエなどはえさに使うと大きすぎて捕まえることができません。そこで、ハエの中でもショウジョウバエを与えています。大きさも丁度よく、よく食べます。

褐色だった体の色は、成虫になると、翅の側面が緑色になります。

飼育する際、まずえさとなる生きた昆虫を用意します。ショウジョウバエは、果物を日陰に置いておくで発生します。釣り具店に行くと“さし虫”といってハエの幼虫が売られているのでふ化させて与えます。飼育するには、あまり難しくないのみなさんも飼育してみてはいかがでしょうか。（島田）

コナラの枯れ枝

昆虫館の北側、小道に沿って伸びる外壁の中ほどに生態展示室に通じる裏口があります。この裏口の脇に高さ約5mのコナラの木が一本植えられています。昆虫館の建設時に植えられた木ですが、日当たりの悪い場所に植えられたせいか、いつもあまり元気がなく、幹にはカミキリムシの幼虫による食害跡も見られます。

このコナラの木の下にドングリ(堅果)の付いた小枝が落ちているのに気付いたのは、9月に入ってからでした。



▲切り落とされた枝

はじめはあまり注意していなかったのですが、よく見るといくつもの小枝が落下しています。

皆さんは夏の終わりから秋の初めにかけて、山道や雑木林を歩いていて青いドングリの付いた小枝が落ちているのに気付いたことはありませんか？

一見風で折れたようにも見えますが、折れ口をよく見ると刃物で切ったかのようになめらかで、また、外皮は放射状に外側に向かってやや広がっ

ています。

風の仕業ではないとすると、このようないたずらをしたのは誰でしょう。実はオトシブミ科(チョッキリ科)の甲虫の仲間、「ハイイロチョッキリ」という虫が犯人なのです。

オトシブミの仲間というと、春から夏にかけて木の葉を切って筒状に巻き、その中に卵を産みつける習



▲ハイイロチョッキリ

性がよく知られていますが、約90種いる日本産のこの仲間の産卵様式は変化に富んでおり、枝や新芽の中に産卵するものや、葉(主脈や葉肉)の中に産卵するもの、さらには他の種が作った揺籃(葉を巻いたゆりかご)に産卵し、居候するものまでいます。そして、ハイイロチョッキリのように実や種子に産卵する種も現在5種ほど確認されています。

ハイイロチョッキリは、他の一般的なオトシブミやチョッキリの仲間より遅く夏に成虫が現れます。

そして、コナラなどの若い小さなドングリを食べて成熟します。成熟して交尾したメスはコナラなどのドングリに産卵します。



産卵の仕方は、まず、ま ▲産卵穴

だ皮が硬くならない若いドングリを選び、ドングリの手前の枝を口で噛んで切れ目を入れます。次に帽子(殻斗)の上から長い口(口吻)を使ってドングリに穴をあけ、その穴に腹端をつけて産卵すると、再度口吻を差し込んで卵を穴の奥に押しこむようです。そして、最後にはじめにつけた枝の切れ目をさらに

切って枝を落とします。

ところで、はじめに触れた昆虫館横のコナラの木ですが、その後、ドングリを付けたまま葉を褐色に変化させ、枯れかかっている小枝がたくさんあるのに気付きました。明らかにハイイロチョッキリが切り落とそうとしたのに、皮一枚で



▲枯れ枝が目立つコナラ

ぶら下がったままのものもあるのですが、多くは小枝に噛み傷はあるものの、産卵後の噛み落とし工作をしていないと思われるものでした。

9月21日に調べたところ、切り落とされて地上に落下していた小枝(堅果1個のものも含む)が57だったのに対し、木に残って枯れはじめていた小枝は132にもなりました。

幼虫はドングリの中を食べて成長し、産卵から1ヶ月ほどするとドングリに穴を開けて外に出て、土の中にもぐりこみ、冬を越します。

ドングリが乾燥すると、中の幼虫の成長は遅れるといわれていますが、落ちずに木に残ったドングリではどうなのでしょう？また、ドングリから脱出するとき、落下などによるダメージはないのでしょうか？ 気になるところです。

昆虫館の周辺では、コナラ以外にクヌギやシラカシ、アラカシでもハイイロチョッキリによる産卵が認められましたが、木に小枝が残って枯れているのが目立つのはコナラだけでした。(木村)

おんしつ 温室だより(5) おんしつ ねんしゅうぎょうし 温室の年中行事

今年も大半が過ぎ、檀原市昆虫館の周りでは稲刈りが終わり、秋も深まってきました。皆さんの身の回りでも、夏の山や海で思い出を作り、秋には運動会や遠足等で楽しみ…、一年の様々な行事が順々に済んでいることでしょう。

さて、昆虫館の展示温室は秋と言えども、毎日20～30℃。でも常夏の温室にも、実は四季折々の作業があるのです。今回は、その“年中行事”をご紹介します。

まずは、温室の大黒柱とも言える植物たちの^{せんてい}剪定や刈り込みです。昆虫館の温室では、季節に応じて剪定等を行っています。例えば、夏場は温室内が40℃近い高温になるため、高木類をよく^{しげ}繁らせ、出来るだけ木陰を作るように管理します。しかし、あまり繁り過ぎると、低木類や草花に日光が当たらず、また全体に風通しが悪くなってしまいます。そこで秋になると、温室内に太陽の光がいっぱいに入るよう高木類を順番に剪定します。その後、低木類についても刈り込みを行うのです。秋口には、閉館してから日没までの間、オウゴチョウやガジュマル、ゴムノキといった高木に脚立やハシゴを掛け、思い切って枝を剪定していきます。次いで、開花期の終わったブーゲンビレアやハイビスカス、ランタナも刈り込みます。中でも、オウゴチョウやブーゲンビレアには鋭いトゲがあって、油断していると、腕が傷だらけになることもあります。

バツサリと剪定された植物は、痛々しい感じもありますが、故郷の沖縄はまさに台風シーズンですから、私達の作業は植物にとって、台風替わりかもしれません。植物たちは「カナワナイナァ」と思っているのでしょうか。剪定作業は春と秋の2回を中心に実施し、その後新芽が吹いて、若葉が青々と伸びる季節となります。ガジュマルの新芽が展開すると、表紙で紹介したツマムラサキマダラが産卵に訪れます。

剪定作業と前後して実施するのが、温室大掃除です。大掃除は年に4回、3月・6月・9月・12月の休館日に行います。大掃除の朝は、作業服に長靴、デッキブラシやタワシ、バケツを手に、温室に全員集合！ 園路や階段、滝や川底、壁や岩^{ぎがん}(擬岩)等を洗います。温室には植物やチョウ・ハチドリがいますので、洗剤や薬品は一切使わずに、水圧と腕力(?)で根気よく磨いていくのです。



特に9月の掃除は、夏のせいか藻類等が繁茂し、なかなか汚れは取れません。気合を入れて磨いていると、長靴や作業服、時には顔面に、バタッとお釣りが跳ね返ることもあります。こうして大掃除が終わると、何だか清々しい気分になります。きれいになった温室で、また明日からお客様をお迎えできると思うと、ちょっと誇らしくもなります。

ところで、昆虫館の温室の壁や天井は、すべてガラス張りになっています。しかし、ガラスの外側は、雨や風、ほこり等で段々汚れていきます。内面も、植物への散水や自動噴霧、チョウやハチドリの^{あん}糞で、やはり汚れがついていきます。このようにチリが積もれば、ガラスはくすんで濁ってしまい、太陽の光が入りにくくなります。光の透過率が下がると、温室内の植物の成長にも大きな影響が出始めます。

そこで、温室の年中行事には、もう一つの大仕事、ガラス清掃があります。大仕事と言っても、実際に私がよじ登ってガラスを磨くわけではありません。高さ15mもある温室のガラス清掃は、プロの職人の方にお任せしています。壁面のガラスを拭くときは足場を組んで、屋根部分の清掃にはクレーン車を動員しての作業です。皆さん身軽にこなしておられるけれど、下から見ている私の方が怖いです。数日かかって、温室のガラスは透き通るようにきれいになります。これで、植物ものびのびと成長出来ますし、チョウ達も喜んでいるようです。

ただ一つだけ困るのは、温室のガラスがあまりに透明だと、野鳥が温室にぶつかってしまうことです。温室のチョウを捕まえようと飛んでくるのか、ガラスに気づかないのか…。何度か獣医さんに駆けつけて戴いたことがあります。どうか鳥さん、温室の周りを飛ぶときは、慎重にお願いしますね！（日比）

おんしつ

温室のおじやま虫(12)

むし

ゴ

キ

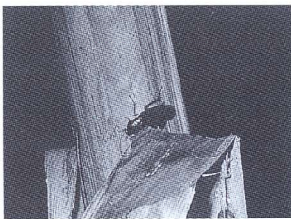
ゴ

キ

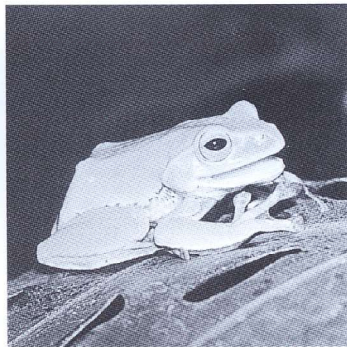
温室内には、チョウやハチドリ、植物、今までのおじやま虫シリーズに登場してきた生き物たちも含めて様々な生き物たちが生活しています。

今回の招かざる客のおじやま虫は、「ゴキブリ」です。ゴキブリは数多い昆虫の中でも、嫌われものの昆虫No. 1でしょう。特に女性からは、目の敵にされていること間違いなしです。温室にとってのゴキブリはというと、やはり良い存在ではありません。しかし、ゴキブリが私たち人間にとって役に立っていることもあるのです。このことについては、後ほど説明することにしましょう。

温室にいるおじやま虫は、クロゴキブリとオガサワラゴキブリの2種類です。クロゴキブリは、やはり見た目に印象が悪いという程度で、害という害を温室に与えていません。私自身はゴキブリがいても割合平気な方です。温室でクロゴキブリをよく見かけるところは、ハチドリのエサ用にショウジョウバエを発生させているバケツの周辺や、あと鉢の下などです。ゴキブリは、基本的に暗いところを好むため、物陰にいるのでしょう。一時期あまりにも多いので粘着性の誘引剤を置いたところ、ゴキブリもかかったのですが、なんと、ネズミまでかかってしまいました。これには本当にびっくりした反面かわいそうになりました。まさかネズミがかかるとは思っていませんから。



▲クロゴキブリ



▲オキナワアオガエル

たくさんいたクロゴキブリですが、今ではどうか、ある生物を温室に入れてから、姿を見かけなくなりました。それは、「オキナワアオガエル」です。アオガエルたちがゴキブリを食べたかどうかはわかりませんが、それまでいたクロゴキブリがいなくなったのは事実です。本当に食べているのでしょうか？もし本当に食べたのであれば、「ゴキブリの多い一家にぜひ1匹…」なんてことは無理ですね。

クロゴキブリがいなくなってしばらくしたころ、つぎなる刺客が温室にやって来ました。それが「オガサワラゴキブリ」です。このゴキブリはクロゴキブリと見た目が違うだけではなく、植物に害をもたらす本当のおじやま虫だったのです。オガサワラゴキブリは、世界の熱帯亜熱帯に分布し、日本では暖かい地方の鳥々で確認されています。温室への侵入ルートは分かりませんが、何かの植物か土に付いて来たのかもしれませんが。先程植物に害を与えと言いましたが、このゴキブリは、植物の茎や葉を食べてしまうのです。ですから、植物の生育はどんどん悪くなり、やがて枯れてしまいます。それに、たちの悪いことに、土に潜る習性を持っているらしく、見つけて捕まえようとしたら、すぐに土に潜ってしまい、なかなか捕まえることができません。本当にやっかいなゴキブリです。何か良い方法はないものでしょうか？



▲オガサワラゴキブリ

ところで、ゴキブリが人間にとって役に立っているという話ですが、実はゴキブリは、世界各地で食用、薬用に用いられているのです。「えっ！ゴキブリが？」と思うでしょうが、ゴキブリのスープやゴキブリの水とん、ゴキブリの卵のスープなどの報告があります。薬用では、漢方の生薬として現在も用いられ、様々な効果があるそうです。しかし、ゴキブリを口の中に入れるということにかなりの抵抗があると思うのは私だけでしょうか。

とにかくにも、ゴキブリが多くての病原菌を持つ昆虫である以上、あまりいてほしくない昆虫には違いありません。温室のオガサワラゴキブリたちよ、どうか植物を食べるのだけは勘弁して下さい。こうしている間にも、あなたの家にもゴキブリが潜んでいるかも…ゴキブリは1匹きいたらその10倍はいると思って下さい。ほら台所の流しの隅っこにも…。

(山本)

げんかん かん かりい びじょ 玄関の華麗な美女たち

～パンジーとビオラ～

今までGONTAでは、放蝶温室内での華麗な美女たちを紹介してきましたが、今回は、みなさんが入館される玄関で咲いている美女を紹介したいと思います。

現在、季節は秋から冬に向かいつつあります。玄関の植物も季節に応じて変化していくのです。今回登場する“玄関の華麗な美女”は、冬から春にかけて花を咲かせ続けるパンジーとビオラの登場です。

《パンジー》

パンジーはスミレ科の一種で、欧州が原産地です。パンジーは、春の花として有名ですが、寒さに強く、10月末頃から翌年4月頃まで花を楽しむことができます。



パンジーは、種類も豊富で赤・紫・白・黄色と色も様々で、また、色だけではなく模様も違うのです。それに、黒色のパンジーまであるほどです。さらに最近では、品種改良が進み、12cmを越す巨大輪のものまであります。

昆虫館では、10月～11月ぐらいにプランターに植え込み、玄関先で翌年の春先まで元気よく咲き続けてくれます。パンジーは、日当たりのよい所を好みますが、乾燥には弱く、水や肥料はこまめに与えなければなりません。そして、次々と花を咲かせるポイントは、花が咲き終われば、こまめに花がらをつみ取ることです。放っておくと種ができて株が弱り、花が咲きにくくなるのが注意点なのです。そして、最大の注意点は、春先になるとアブラムシが発生しやすいことです。アブラムシは、雨の直接当たらない箇所特に多く寄生し、姿を見せるとあつと言う間に広がり生育を悪くしてしまうのです。その他には、葉を食害する夜行性のヨトウムシも発生するので気をつけなければなりません。以前、GONTA 25号で紹介したツマグロヒョウモンもパンジーにとって害虫になるわけです。春先になれば、ツマグロヒョウモンがパンジーのところに訪れ、卵を産みつけていくのがよくわかるでしょう。パンジーは別

名サンシキスミレ（三色すみれ）とも呼ばれています。人間にとってパンジーは人気の高い植物ですが害虫にとっても人気が高いようですね。

《ビオラ》

次に紹介するビオラは、パンジーと同じく欧州原産のスミレ科の一種で血縁的には極めて近い仲間です。ビオラは、パンジーよりも花が小さく、より多くの花を咲かせるのが特徴です。



ビオラは、パンジーよりも花つきが多く、株はよく分枝して茂ります。それに、パンジー同様、花の種類も多く、赤・

紫・白・黄・オレンジとたいへん多彩であり、ビオラもパンジーも19世紀初期から品種改良が行われてきて、歴史もたいへん古いのです。

現在、栽培されているビオラは、園芸的には次の二つのグループに分けられます。一つは大輪系のビオラです。大輪といってもパンジーよりも小さく、花径約3cmぐらいの花です。実はパンジーは、ビオラを中心に他種と交配させて改良されてできた種なのです。

二つめは、小輪系ビオラです。花径1.5cmぐらいの極小輪系で無数の花を咲かせ、満開時にはまるで花のカーペットを敷きつめたようになり、とてもきれいです。それに、害虫の発生もほとんどなく、雨による傷みがパンジーより少ないため、雨の多い日本では春の終わりまで花を咲かせます。花屋さんの店頭などでは、パンジーは切り花としても出回っていますが、ビオラはほとんど扱われていません。この2種類、甲乙つけがたい綺麗な花を咲かせるのですが、残念ながら1年草なのです。何かもったいない気もします。

昆虫館では、10月末ごろから2種類を植え込み、玄関で見られます。何色になるかは、スタッフの気まぐれで変わるかもしれませんが、また、これからいろいろな植物を季節に応じて登場させていきたいと思っています。

さて次回は、どんな“玄関の華麗美女たち”が登場するのでしょうか。お楽しみに。（松村）

ぎっ
雑き
記ちよう
帳

今年の夏は特別の猛暑となり、降雨量も梅雨期間で例年の80%と少なく、このため水道水源であるダムの貯水量が日毎に減少し、各地で取水制限が実施されました。橿原市も県営水道より多くの給水を受けているため制限されておりましたが、幸い市民生活に影響することなく、給水制限が解除されホッとした次第です。と云うのも、展示温室には鑑賞用植物をはじめ、多くのチョウの食用となる樹木が植えられており、温度調節のこともあって、これらへの散水及び自動噴霧を、毎日朝夕欠かすことなく行っているからです。

ところで、この暑いさなか、第13回特別展「田んぼの虫たち、生きものたち」を、7月31日より開催いたしております。毎回のことながら、特別展用としての費用は少なく苦慮するところですが、職員一丸となり創意工夫し、標本や生態展示の準備並びに配置を行っています。展示物(?)の一つとして、案山子の「ゴンタ」君があります。これは、顔の部分をくり抜いてあり、観光地でよく見かける立派なモノではありませんが、写真撮影用に設置してあり



▲案山子の「ゴンタ」君(特別展より)

ます。

ゴンタ君は、全くの手作りですが、なかなかの出来栄え(?)で、来館者の方々には好評で、親子連れの方達が入り替わり撮影されているのが見受けられます。ゴンタ君の前面に、季節の草花を配置しており、これも生きものなので手入れが大変ですが、立ち止まって楽しく雑談しシャッターを押している姿を見ると、頑張らねばと思いを新たにしている今日この頃です。

(館長 上村修久)

いんふおめいしよん

▶開催中! 第13回特別展

「田んぼの虫たち、生きものたち」

11月18日(日)まで 昆虫館二階展示室にて

10月28日(日)「イナゴを食べよう!」

11月4日(日)「稲わらのゆくえ〜しめ縄等を作ろう!」

▶11月 第33回むしムシゼミな〜る

「オスとメスの交尾戦略」

〜チョウ類の場合〜

講師: 渡辺 守 氏 (三重大大学教授)

日時: 11月11日(日) 午後1時〜3時頃

会場: 橿原市昆虫館 会議室

内容: チョウ類の生態や体のしくみ、交尾行動について、スライド等を使い、最新の話題をやさしく紹介。

対象: 小学生以上 (小学生は保護者同伴のこと)

定員: 50名

持物: 筆記用具

参加費: 無料(入館料必要/大人400円・学生300円・小人100円)

申込: 往復葉書に、行事名、参加者全員の氏名・学年、住所・電話番号を記入し、10月31日(水)必着で昆虫館にご応募下さい。応募多数の場合は抽選。

交通: 当日は近鉄大和八木駅より奈良交通バス運行。

▶12月 第33回観察教室

「ミツバチからのプレゼント」

日時: 12月9日(日) 午後1時30分〜3時30分頃

会場: 昆虫館 会議室

内容: ミツバチの話と、巣を使ってロウソク作り体験。

対象: 小学生以上で、親子又は家族単位

定員: 30名

持物: 筆記用具

参加費: 一人500円(材料費実費/別途、入館料必要)

申込: 往復葉書に、行事名、参加者全員の氏名・学年、住所・電話番号を記入し、11月30日(金)必着で昆虫館にご応募下さい。応募多数の場合は抽選です。

☆昆虫館の年末年始のお休みは、12月28日〜1月2日です。詳しくは昆虫館にお問い合わせ下さい。

橿原市昆虫館だより GONTA Vol.11 No.4

2001年(平成13年)10月20日発行 (通巻44号)

編集・発行/橿原市昆虫館

〒634-0024 奈良県橿原市南山町624番地

Tel.0744-24-7246 Fax.0744-24-9128

http://www.city.kashihara.nara.jp

印刷・製本/株式会社 アイブリコム